前へ

第二話

當眞嗣朗

「前へ！」第二話

當眞嗣朗

Aは、その言葉を頭のなかで素早くくりかえした。それは今、自分自身にとって、最も必要なことだった。これまでの自分を肯定するために。そして、これからの自分を築いていくために。

とりあえずAが思ったのは、自費出版をしてみよう、というものだった。

自分で資金を投じて、本を出版してみようと思ったのだ。

何故、本を？　当然それは、凡百の人間の考える最良のアイディアとは言えない閃きだった。なにか新しいことを始めようと考えて、自費で本を出版しよう等と考える人間は、少なくないとは言え、大多数を占めているわけではないだろう。また、自費出版に関しては、詐欺被害のような問題も数多く散見するのだ。よほど注意して事に当たらなければ、痛い目を見ることになるはずだった。

それでも一旦動き出した自分の思考に歯止めをかけるのは、我がことながら難しかった。それはまるで突然降り出した雨のように、一度勢いを増したら、なかなか落ち着くことがなかった。こうなったら、降るだけ降って、その後なにが起きるのかを待つしかないのだ。例えその後、不幸な大震災がや

ってきたとしても、それは黙って受け入れるより仕方のないことなのだ。幸いなことにAは、出版の世界に知人を持っていた。その男の勤めている出版社は、地方のちいさな出版社だったが、業界では確かな信頼を得ていた。そこに問い合わせれば、とりあえず原稿を引き受けてはくれるだろう。

Aは子供の頃からとにかく本を読むことが好きだった。学校の休み時間や帰宅後に、自宅の自分の部屋に閉じこもって、とにかく暇を見つけては本のページをめくっていた。まるで紙に印刷された文字が、現実の世界よりもずっと興味深く、豊かなリアリティを持っているとでも言うかのように。それは最早、持て余した暇を読書で潰すという程度のものではなく、読書をすることが学業を押しのけて仕事そのものとなり、それで毎日がビデオの早送りのように慌しく過ぎていくといった感じだった。それでいて頭のなかは、つねにクリアな状態に保たれていて、そこには滋養に満ちた豊かなヴィジョンが溢れそうなほどに詰まっているのだった。

手に取る本の多くは学校の図書室から借りてきたもので、主に小説だった。「ナルニア国物語」や「はてしない物語」などの外国のファンタジー小説や、外国のミステリー全集のようなものを、手当たりしだい片っ端から読んでいった。冷房の効いた静かで快適なその空間は、その当時のまだまだ

未成熟なAにとって、一種の避難場所として有効に機能した。そこにはクラスメイトたちの意地悪な目はなく、ひとり本に向かっているだけで確実に、「ここではないどこか」に行けたのだ。そしてそれは同時に、現実の世界を強く補強してくれる「なにか」を与えてくれた。原始の森で産声をあげた人類が、進歩というリレーのバトンを、Aに力強く渡したのだ。長い時を経て。

それが生きていく上でなにかの役に立ったのか？　そう誰かに問いかけられたら、Aは即答するだろう。じゅうぶんに役立ったのだ、と。苦しい減量の果てに試合に挑んだ若いボクサーの繰り出す右ストレートのように。それは素早い動きで相手のガードを潜り抜け、鋭くその顎を破壊するだろう。そしてAは敵のいないリングの上で、熱狂した観衆に向かってこう言うのだ。

「ぼくは、読んだ！　文句があるか？」

Aは幼少の頃から言葉に取り憑かれていた。それは頭の中でなにかを訴えながら忙しなく飛び交い、出口を探して迷っていた。そのままの状態で放置すればいずれそれらの意気盛んな言葉たちは、不満を内側に溜め込んだまま風船のように膨らみ、盛大に破裂するかもしれなかった。だからAは、それらを自分の身体の外側へと解放する必要があった。それは自然の摂理でもあった。

その語られるべき言葉は、それぞれに繋がりあってうねり、物語群を形成していた。それらはいくつものパターンを持ち、様々な印象を読み手に抱かせていた。心地よく微笑ませるもの、泣かせるもの、ある場合には不快感を与え、怒りを引き起こすものもあった。それらはまっさらな画用紙の上に絵や文字となって記され、簡単に製本されて読者の下へと届けられた。それを読むのは主に親や兄弟だった。そしてそれから親戚たちの目に触れ、時には学校のクラスメイトたちにまで届いた。

さて、自費出版だ。

それからAは数ヶ月もの時間を、これからの自分の人生をあらゆる面で下支えしてくれるだろう作品の執筆に当てなければならなかった。読書をする時間、そして料理や掃除をする時間を削り、その一点を唯一の突破口としてしっかりと見定める必要があった。なんの突破口？　もちろん、自らの対峙している手ごわい世の中に対するものだ。それ以外に、なにがある？

その作業は、昼夜を問わずおこなわれた。とにかく集中力が最大の武器となった。コンピューターを起動させ、ワープロソフトを立ち上げ、まだなにも記されていない真っ白な画面に文字を打ち込んでいく地道な作業は、自分の内面に深く埋もれ、未

だ発見されずにいるものを丁寧に掘り出していくような作業だった。時には、それを辛く感じることもあった。

しかしAは、その作業を無事、やり遂げることが出来たのだった。

出版社に持ち込むべき原稿を一通り書き終えたAの頭の中は、厄介な片付けを終えた後の机の上のように、綺麗に整理整頓されていた。そこには僅かな埃もなく、表面は丁寧に磨かれ、必要なものは所定の位置にきちんと仕舞われてあった。本は書棚に整然と並べられ、筆記用具はペンホルダーにきちんと立てられていた。

それからAは数週間を費やして、文章の見直しを念入りにおこなった。高いレベルでの集中力を絶やさず、根気と地道な努力を持って、気に入らない箇所や明らかな間違いが認められる箇所を、じっくりと丁寧にべつの言葉に書き換えていった。小幅な修正で足りる場合があり、大幅な変更を求められる場合があった。それでも文章のトーンは一定のリズムをキープしていたし、物語はその流れを塞き止められることなくしっかりと抑揚を保っていたから、それで全体の印象が変わることはなかった。

すべての作業を終えて、最終的な見直しをおこ

なった後、Ａはプリンターの電源を入れた。

プリントアウトされた原稿の束は、それを持つ手にずっしりとした重量を感じさせた。それは四〇〇字詰め原稿用紙に換算して、六〇〇枚近くの分量があった。それらの重厚な文字の連なりは、Ａの世界観を代弁する弁士であり、未知の世界を切り開く武器であった。そして豊穣の実りをもたらしてくれるまだ小さな苗だった。

Ａは自分自身に、よく言い聞かせる必要があった。

お前はよくやった！

その完成した原稿を手にＡは、まるで世界旅行に出かける船の上に立っているような気持ちで、那覇市内にオフィスを構えるその出版社を訪ねた。古い煉瓦造りのビルの一階にあるそのオフィスは、ヒトの目につくような看板を出していなかった。言われなければ、そこが出版社だということは誰にも判らないだろう。もっともその手合いの会社に出入りするヒトは業界関係者が大半で、関係者の間ではじゅうぶんに認知されているのだが。

ドアを開いて中に入ると、それほど広くはない空間に机や棚などが窮屈そうに収まっていて、そこで複数名の従業員が働いていた。

その時、いくつものベストセラーを世に送り出

したその有名な出版社の職員たちは、「よく来たね」とも「待っていたよ」とも言わなかった。そこには、これから自費を投じて出版の世界に参入したいと考えている物好きな来客を、手放しで歓迎するというムードは微塵も存在しなかった。じゃっかんの後ろ暗い心持ちが、彼らの表情を暗く硬いものへと変えていた。彼らは、同情心に満ちた眼差しで、静かにこちら側へと視線を向けていた。意気揚々とした気持ちで事に臨んでいたAは、いくぶん出鼻をくじかれる格好となってしまった。

しかし実際に、彼らと膝を付きあわせて、じっくりと出版の世界に関する話を聞いてみると、その対応にも合点がいった。

Aは、しばらくの間、それらの困難な事情のすべてを頭の中で組み合わせて形をつくり、それを客観的にじっくりと観察をして、またべつの形へと組み替えてみた。その作業は、ずいぶんと手間のかかるものだった。それだけでいくつもの小説の筋書きを作ることが可能な程に。一度、組みあがったイメージを壊してしまうと、二度と同じものは浮かび上がってはこなかった。その作業をしばらく続けていると、妥当と思える形が見えてきた。それは曖昧な輪郭を持ってはいたが、確かな方向性を示しているように思えた。

それは、こうだ。

「キミはベストセラー作家になりたくはないのか？　本が飛ぶように売れ、権威ある文学賞をいくつも受賞し、一躍メディアの寵児となる。そんな夢のような地位を手に入れたくはないのか？　そんな誘惑に彩られた問いに、残念ながらぼくは、ノーと答えることは出来そうにありません。それは単なるアマチュアに過ぎない無名の書き手であるぼくにとっては、あまりにも酷な問いです。作家としての成功は夢の果実ですし、そこに興味がないと言えば、それはまったくの嘘になります。当然、ぼくにだって、野心はあります。理性で制御することが困難なほどに。しかし同時に、こうも思うんです。多額の自己資金を投じてまでも、世にその価値を問いたい何かを、あなたは持ち合わせているのか？　そう問われることがあれば、ぼくは即刻首肯し、イエスと答えるだろう、と。大変残念なことですが、ぼくには子供がいません。しかしもしも仮に自分の子供が、なにかしら新しいチャレンジを始めたいとぼくに相談を持ち掛けてきたら、ぼくは迷わずに、まずはやってみろ、と言うはずです。そしてその後で、それでその結果、どうなった？と訊くでしょう。好奇心に満ちた子供の顔で。そこでその問いに対する答えを持ち合わせない類いの人間とは、きっとぼくは、仲良くすることが出来ないのです。だからぼくは、あなたの話を踏まえた上で、前に進むでしょう。出版の世界に、まずは飛び込んでみるのです」

そしてAは、自費出版のための作業をスタートさせた。

それから数か月の日にちを、Aはじゃっかん落ち着かない気持ちで過ごした。日差しは真夏へと向けて強さを増していき、足元の影はどんどん濃くなっていった。風は熱気を含んで重たく湿り、じっとしていると不快な汗が身体じゅうに噴き出した。部屋の中で扇風機の風に当たりながら、寒さに身体を震わせた時期があったことが酷く信じられない気持ちでいっぱいだった。

そして、その運命の日はやってきた。まずは事前に担当編集者から、本がようやく完成したという電話連絡が入った。その声は平静さを装っているように感じられた。しかし内心では、抑えきれないほどの興奮が渦を巻いているのかもしれなかった。じっくりと聞いてみればその声も、いくぶん上擦っているような印象があった。それから彼は、さっそく自宅まで届けに伺いたいのだが、都合の良い時間帯はあるだろうか？　と訊いてきた。Aは、心臓が早鐘を打つのを感じた。ついにこの日が来た！　全身の血液が独自の意思を持ち、身体の外側の様子を窺い始めたような感覚があった。指先が落ち着かなくなり、意味もなく曲げたり伸ばしたりを繰り返した。それから冷静になり、心をようく落ち着けて、何時だって構わない、首を長くして

待っている、と答えた。そして、胸を躍らせながら通話を終えた。

完成したその本は、見る者の心持ちをすっきりと爽快にさせるかのような、鮮やかな青い表紙をしていた。じっと見つめていると、その青さの中に無意識の領域が広がっていくような不思議な気持ちになった。それは、なかなか底の見えない深い井戸の中を覗き込んだ時のような、重たい印象を与えた。上の方に、シンプルな字体で本のタイトルと著者名（それは、Ａの名前だ）が印刷されてある。それは適度な大きさを持ち、控えめに自己をアピールしていた。表紙と同色の帯には、読者の興味を惹くようなコピーが踊り、本文の文章が数行、抜き出されてあった。その周囲には、大小の星のイラストがいくつも配されている。表紙カバーは出来立ての真新しさを示して艶やかで、すべすべとした手触りがあった。それはじゅうぶんな厚みを持ち、適度な重みを感じさせた。ハードカバーの立派な装丁の本だ。それは生命でもないのに、命が宿ったかのような鼓動を打っていた。そんな気持ちを抱かせた。

さあ、ぼくの人生がはじまる！

つづく